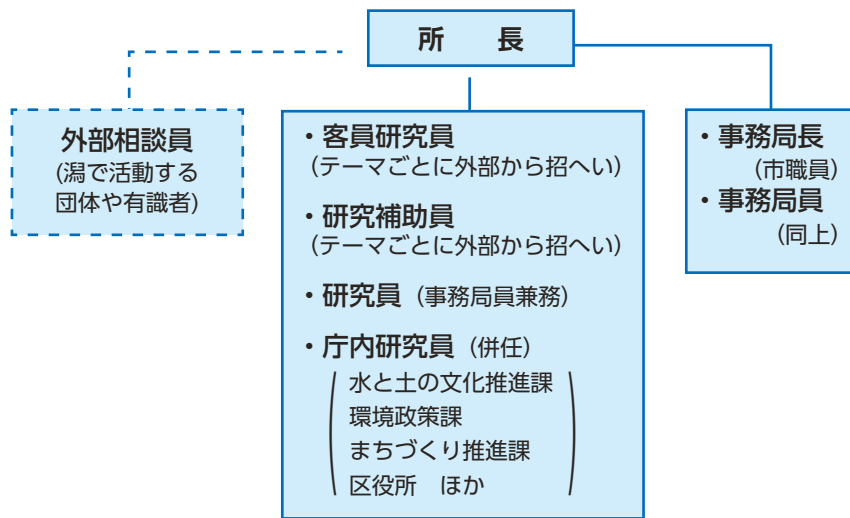


参 考 资 料

平成27年度潟環境研究所 研究体制

《組織体制図》



所 長

- ・大熊 孝：新潟大学 名誉教授（河川工学）、ビュー福島潟 七代目名誉館長

客員研究員

- ・吉川 夏樹：新潟大学 農学部 生産環境科学科 准教授（農業水利・農業土木）
- ・志賀 隆：新潟大学 教育学部 自然情報講座 准教授（植物分類・保全生態）

研究補助員

- ・井上 信夫：生物多様性保全ネットワーク新潟 事務局（魚類）
- ・太田 和宏：赤塚中学校地域教育コーディネーター（歴史的調査・建物）

事務局・研究員

- ・水野 利数：潟環境研究所事務局
- ・吉川 巨人：潟環境研究所 主査（係長相当）
- ・隅 杏奈：潟環境研究所 主事（学芸員・民俗）
- ・佐久間由紀恵：潟環境研究所主任
- ・丸山 紗知：潟環境研究所 副主査（学芸員・自然環境）

庁内研究員（併任）

- ・中島 正裕：水と土の文化推進課
- ・八木 実紀：水と土の文化推進課
- ・工藤 勇一：環境政策課
- ・小林 博隆：環境政策課
- ・阿部 秀人：環境政策課
- ・藤井大三郎：都市政策部
田園まちづくりアドバイザー
- ・横田 浩司：まちづくり推進課
- ・横山 正人：まちづくり推進課
- ・西脇 哲：北区地域課
- ・家塚 剛：東区建設課
- ・伊藤徹太郎：中央区地域課
- ・佐藤 瑛子：江南区地域課
- ・落合 謙：秋葉区建設課
- ・新井田 智：南区地域課
- ・渡辺 希：西区地域課
- ・長倉 尚：西蒲区地域課

外部相談員

- ・五十嵐初司：じゅんさい池公園を守る会 事務局長
- ・大谷 一男：黒埤南ふれあい協議会 会長
／木場の郷土を愛する会 代表
- ・加藤 功：新潟映像制作ボランティア 副代表
- ・小山 芳寛：水の駅「ビュー福島潟」館長
- ・齋藤 一雄：上堰潟公園を育てる会 代表
- ・佐藤 安男：水の駅「ビュー福島潟」事務局長
- ・清野 諠：北山池公園の自然を愛する会 会長
- ・高橋 剛：内沼自治会 会長
- ・中島 榮一：潟東樋口記念美術館・潟東歴史民俗資料館 館長
- ・松原 将：新潟市土地基盤整備推進協議会 企画部会長
- ・宮尾 浩史：宮尾農園 代表
- ・村山 和夫：松浜コミュニティ協議会 地元学協会 部会長
- ・森 行人：新潟市歴史博物館（みなとぴあ）学芸員
- ・山口 浩二：新潟市南商工振興会 副会長
- ・山崎 敬雄：岡方地区コミュニティ委員会 会長
- ・涌井 晴之：佐潟と歩む赤塚の会 代表

新潟市潟環境研究所 平成27年度第1回定例会議（概要）

日時：平成27年5月28日（木）午後3時～午後5時15分

場所：新潟市役所第1分館101会議室

■会議概要

1 報告及び情報提供

- ・平成27年度潟環境研究所体制について（事務局）
- ・ビュー福島潟名誉館長就任について（水の駅「ビュー福島潟」）
- ・「市民ハクチョウ・ホワイト・フェスタ（仮称）」について（環境政策課）
- ・鳥屋野潟湖岸堤整備について（まちづくり推進課）
- ・企画展「田んぼで魚とり展」について（みなとぴあ）

2 講義

※今年度の講義について

今年度の定例会議では、市内にある潟で活動している団体の皆さまから講義をお願いする予定です。
今回は「鳥屋野潟」に関する活動についての講義です。

「もっともっと鳥屋野潟の魅力を引き出したい」（村尾建治ほか／新潟市南商工振興会）

【その1】「カナル彩」を中心とした鳥屋野潟及びその周辺の盛り上げ

山口 浩二／新潟市南商工振興会副会長

「カナル彩」は新潟市南商工振興会が主催する「NIIGATAスプリングフェスティバル」と新潟県が主催する「新潟県都市緑花フェア」の合同イベントの総称である。今年は、2015年4月26日（日）に開催され、1日で約10万人の集客があった。今年のはじめての試みとして、ロボット大会を開催したが、数年後には水質改善ロボット、潟底清掃ロボットなどを使った、鳥屋野潟の浄化につながるような大会にもしていきたい。「カナル彩」の今後としては、イベントのきっかけがクリーン作戦だったことから、水の浄化を目指す「クリーン」をキーワードとしてすすめていきたい。

【その2】鳥屋野潟周辺のブランド化を目指す～ポータルサイト紹介～

松浦 柁太郎／新潟市南商工振興会会員

「潟」再生とブランディングのプラットフォームにするという目的のもと、鳥屋野潟の魅力を8つの切り口から発信していくポータルサイト「TOYANOGATA.jp」を開設した。

かつて鳥屋野潟はそこで泳いだり、魚をとったり、生活に密着した場だった。もう一度再生して、今の暮らしにあったかたちで鳥屋野潟の魅力を伝えていきたい。このサイトでは、鳥屋野潟周辺のイベント、お店、もの、人の魅力といった、いまの鳥屋野潟がわかるような情報を伝えたい。「水と土の芸術祭2015」の開催期間中、潟の歴史・素材感・世界観にスポットをあてた手みやげを販売する「潟マルシェ」、潟周りの飲食店と新潟の個性的な農家がコラボレーションして限定メニューを出す「潟食めぐり」、出展作家との作品鑑賞や交流会などを企画している。

【その3】「とやの潟環境舟運」を中心とした潟の活用の仕方及び今後の展開

相楽 治／新潟市南商工振興会事務局長

昨年とやの潟の真ん中に20数人乗り回遊船を出した。「とやの潟環境舟運」のねらいは、職・住・遊融合の水と触れ合いながら暮らせる贅沢な潟ライフブランドづくりにある。2015年は「潟の再生・活用の可能性を探る」をテーマに、乗船とカヌー体験など潟の広さを体験し、潟をじっくりと考えてもらうためのメニューを実施する予定である。

今後は、潟の魅力発見とその活用の仕方に着目し、経済的、社会的、都市的な側面から潟を再評価していきたい。

今の汚いままの鳥屋野潟ではなく、シジミがとれた頃の豊かな時代の環境に戻したい。そのためには“人間と潟とのよい関係”のような潟を復活させ、環境教育・潟育・癒しの舟運が実施できるようにしていきたい。

【その4】魅力を増していく鳥屋野潟への期待と夢

村尾 建治／新潟市南商工振興会会長

鳥屋野潟を魅力的で賑わいのある憩いの場にしたいと考えている。

湖面には様々な種類のボートが何艘も浮かび、白いヨットが数艘風を受けて走っている、そのような楽しくて魅力的なかつての潟面（湖面）を取り戻したい。また、鳥屋野潟でとれた魚介類は“潟ブランド”で本町市場や人情横丁で飛ぶように売れていた時代があった。豊かな潟の恵みを再び、楽しんでもらえるようにしたい。将来、潟の周辺にはロボット産業が定着し、ロボットバレーと呼ばれるような、日本のロボット技術を先導する場として活力がうまれるといい。

潟の浄化だけでなく、まわりの街並みも整備したら、鳥屋野潟周辺は訪れる人々に夢と創造を与える場となる。“水の都にいがた”と認識してもらうには「鳥屋野潟がキラキラと魅力的に輝くこと」で実現できるのではないかな。そんな鳥屋野潟にしたい。

新潟市潟環境研究所 平成27年度第2回定例会議（概要）

日時：平成27年7月23日（木）午後3時～午後5時15分

場所：新潟市役所第1分館101会議室

■会議概要

1 報告及び情報提供

- ・第18回福島潟自然文化祭について（北区地域課）
- ・ビュー福島潟名誉館長事業について（ビュー福島潟）
- ・とやの物語2015について（潟環境研究所事務局）
- ・新たな広域連携促進事業について（潟環境研究所事務局）
- ・「平成26年度研究成果報告書」「潟マップ」「ニュースレター第3号」発刊について（潟環境研究所事務局）

2 講義（内沼潟、十二潟）

「はじめまして、内沼潟ですよ。」高橋 剛／内沼自治会会長

- ・内沼潟は福島潟の兄弟潟であり、かつては福島潟とつながっていた。1680年代、福島潟と内沼潟がつながっていた当時の水面積は約5,800ha（約5,800町歩）と、旧家佐藤家文書に記録されている。
- ・1816（文化13）年に築堤された山倉新道（現主要地方道新潟・五泉・間瀬線）によって、福島潟から分離されて内沼潟ができた。内沼潟は地域ではかつて「新開潟（しんがいがた、しんげがた）」とも呼ばれていた。
- ・戦後、周囲から干拓が進行し、業者による埋め立てが始まる直前の内沼潟の面積は約6haであった。この時は南東方向に細長い潟であったが、1995（平成7）年から業者によって北東部の埋め立てが始まった。この埋め立てによって水質が汚染されていないか、年に一回、潟の水質検査を実施している。
- ・今までは内沼潟で何か困った問題が起こったとき、個人が個別に、豊栄土地改良区や埋め立て業者にその対応をお願いしていた。関係者同士が集まって話し合うのは、何か問題が起こった時であり、それは10年に2度だけしかなかった。しかし、2014年からは、内沼自治会、土地改良区、埋め立て業者など関係者全員が集まる機会を作り、巡検を行っている。関係者との巡検・会議を定例化し、内沼潟を同じ目線でみることによって、問題がちぐはぐになって生じる混乱を避けるためである。
- ・内沼潟共有者の会は2010（平成22）年に設立した。内沼潟の共有者は57人いるが、内沼潟の将来の方向性については役員4名に一任してもらうよう、共有者から承諾を得ている。これにより、まとまった話ができるようになった。内沼潟の方向性としては、ごみ投棄の防止や、自然公園化を目指している。
- ・水面積0.6haと、潟が小さくなった後も、3年前くらいまではハスが潟一面に咲き誇っていた。現在はハスがまったく見られなくなったため、またハスが咲くようになればいいと考えている。

- ・現在、潟をゴミ捨て場として使っている人がいる。春先、秋の収穫後と、定期的にゴミが投棄されているため、なんとかしてゴミを捨てる行為をやめさせたい。
- ・内沼潟は小さい潟だが、朝靄がかかるときや雪の季節には幽玄の世界を演出しており、思わず足を止めて見とれるほど美しい。内沼潟は目立たなくてもよいので、地域に生きる人の傍らで、「ちょうどよく」存在してほしいと考えている。内沼潟は内沼集落にとってはなくてはならない潟であり、地域の人と潟が共存していけたらいいと思う。

「十二潟について」山崎 敬雄／岡方コミュニティ委員会会長

- ・十二潟は阿賀野川の蛇行跡であり、三日月湖である。かつては阿賀野川の本流で、地元では「古阿賀（ふるあが）」や「前の川（まえのかわ）」とも呼ばれていた。
- ・1917（大正6）年から1933（昭和8）年までの17年間、阿賀野川の堤防工事が行われた。その際、阿賀野川の蛇行部分が堤防によって切り離され、十二潟の原型ができた。
- ・1985（昭和60）年頃、阿賀野川における砂利や川砂の採取が禁止になった。その頃から業者が生コンクリート用に、十二潟でも中洲で川砂を採取するようになった。十二潟の大部分は民有地であり、地権者は川砂を採取した場所に土砂を入れ、農地に戻してもらっていた。そのついでに地権者の意向で、湖面の方も埋め立ててもらった。これが十二潟の湖面が小さくなっていったきっかけである。
- ・十二潟は農業用水池として使われていたが、昭和の終わり頃から不法投棄が進んだ。
- ・2001（平成13）年12月、旧豊栄市で、地域のことは地域で考え自ら解決する「住民自治」の組織として、岡方地区コミュニティ委員会が立ち上がった。ここで、地域共通の資源であり課題でもあった十二潟の環境保全に焦点があてられ、不法投棄の対策として、一斉清掃が組み込まれるようになった。今も毎年3月下旬～4月上旬くらいまでの間、50～60人のボランティアでゴミ拾いを行っている。その結果、十二潟のごみは年々減っている。
- ・2008（平成20）年には区づくり予算で十二潟の本格的な保全にのりだし、土砂の浚渫をおこなった。翌年には、第一回水と土の芸術祭において、十二潟で昔使っていた木舟を再現した。この木舟は常時設置し、観察会や環境学習等子どもたちだけでなく、一般の方でも乗ってもらい、アサザなどを見ていただくようにしている。
- ・2010（平成22）年には、潟の環境に関心をもっていただくため観察デッキを作り、また、地元住民の意識調査を始めた。そこでは、十二潟において必要だと思うこととして、不法投棄の防止、自然環境の保全があがっている。
- ・2012（平成24）年以降、小中学校の総合学習の時間を利用し、潟の環境や歴史、水質調査等実施し、地域をあげて十二潟の保全活動に取り組んでいる。
- ・十二潟の生態系は時代と共に変わってきた。昔はたくさんの湧水があり、水量は豊富であった。また、昭和40年代くらいまではイトヨも多く確認された。現在はブルーギルといった特定外来生物も確認されており、これからも環境調査を継続していきたい。
- ・植物相も変わっている。かつて十二潟はハスとヒシで湖面が覆われていたが、戦前にはヒシしかなかったとのことである。その後土砂の流入などにより水深が浅くなり、今はアサザやガガブタが湖面に広がっている。現在水深は、深いところでも1m20cmほどである。
- ・十二潟の今後の課題は、民有地の多さと後継者育成の問題である。民有地が多く埋立てが進んでいるため、今の十二潟を残すために潟環境の啓発活動を行っていく必要がある。また、川舟（木舟）の漕ぎ手の高齢化も進んでいる。保全活動を継続して次の世代にどうやって引き継ぐか、後継者をどうやって育てていくかが、これからの課題である。

新潟市潟環境研究所 平成27年度第3回定例会議（概要）

日時：平成27年9月24日（木）午後3時～午後5時15分

場所：新潟市役所第1分館101会議室

■会議概要

1. 報告及び情報提供

- ・「砂丘に学ぶ」講演会について（太田研究補助員）
- ・「市民ハクチョウ・ホホワイト・フェスタ」及び「市民ハクチョウ調査」について（環境政策課）
- ・上堰潟生き物調査結果について（井上研究補助員）
- ・木場潟公園（石川県小松市）について（視察報告）（大熊所長）

2. 講義

「ドンチ池について」中原 藤雄／赤塚郷土研究会会長

- ・ドンチ池は、西区中権寺（地籍は赤塚）にある、面積0.3haの砂丘湖で水源は主に湧水である。県道新潟～寺泊線、下谷内バス停から徒歩5分の場所にあるが、池へ近づくには道が整備されておらず、東側の墓地と南側の墓地からけもの道があるだけである。地元の者でも場所を知らない者が多い。
- ・池の周りには松、竹が茂り、水面にはスイレンが生育している。40年程前は今ほど木々が生い茂っておらず、周りから池がよく見えた。
- ・ドンチ池には別名が多数あり、地元の人は「尼池」、「論地池」、「グランド池」、「呑池」等と呼んでいる。
- ・1745（延享2）年の夏に発見された瓶に記録された文章の中に「中宮寺」という寺の名前があった。中宮寺という尼寺が中権寺集落にあって、寺の付近に池があったので、尼池とよばれるようになったと考えられる。
- ・中権寺の忠兵衛家と尼池（ドンチ池）の間に小高い山があり、村人はこの山を尼池山と呼び、池の周辺一帯を「池山」と呼んだ。池山は高速道路建設時に砂を使うため削られ現在は墓地になっている。
- ・池の東側は浅瀬で、かつてはポンプ小屋がたち、池の水を周りの田の用水として使っていた時期もあった。今は小屋の土台だけが残っている。浅瀬の部分は昔、馬の脚洗い場だった。
- ・子どもの頃（昭和20年代）は池がプール代わりで、学校が終わると毎日のように泳ぎに行った。水深が深いため足がつかない。池の真ん中に生えている木を目指し、必死で泳いだ記憶がある。地下水だから、当時は底がきれいに見えた。
- ・昭和中期頃に池の水を干す話が持ち上がり、当時の村議会議員らが中心となりポンプによる排水を試みた。しかし、一定量までは排水できたが、それ以上は水位が下がらなかった。
- ・茸取り、薪取り（松枝、松の葉、松かさ）、魚釣りや雪遊び、散策の場として親しまれた。内野、坂井輪、中野小屋地区から学校の遠足で子どもたちが来たこともあった。かつて、池の西側に別荘が建っていた。池に稚魚を放流したり、高台に東屋を建てたり、美観のために力をいれた時期もあった。
- ・一方で、尼池（ドンチ池）には様々な伝説や幽霊話がある。1925（大正14）年に中権寺の子どもたちが尼池の側で狐に化かされたという話がある。昭和初期まで、池山には狐が生息していた。1927（昭和2）年に尼池（ドンチ池）で亡くなった女性の霊が池山にでる、という噂が広まった。他にも人魂を見たという噂話もある。池山にはふくろうが生息していた。墓地や火葬場近くでリンが燃えている中、ふくろうの羽にリンが燃え移って飛びまわる姿が、火の玉に見えたものと推測される。それが幽霊伝説と結びついて伝わったものと考えられる。

「先人の残してくれた宝 北山池」清野 諒／北山池公園の自然を愛する会会長

- ・北山池は江南区の北山池公園内にある。公園面積は約3.6ha、池面積約1.6ha、周囲約600mである。
- ・御衣黄（みどりの桜）の咲く公園として4月には見物客で賑わう。また、貴重なアサザが3カ所に生息している。「北山池公園の自然を愛する会」は御衣黄やアサザの現地説明会や公園の草取りなどの活動を行っている。
- ・北山池は新潟第一砂丘の間にできた砂丘湖で、砂丘列の上に集落がある。かつては、砂丘の麓に北山池（兄弟池）、丸山の池、茗荷谷の池、松山の池（稚児池）が並んで存在した。各々の池には高さ10m～20m程度の松林に囲まれた砂山が連なっていた。
- ・池や砂山は各集落の入会地、共有地として地域の生活環境に密着し、無くてはならないものだった。子どもの頃、山の畑で野菜を作り、大人たちが池で水を汲んで、砂山を上り共有地の畑に水をやっていた。松林の松葉や枝を燃料にしたりした。

- ・昭和30年代以降、農地整備などで共有地等の必要性が薄れ、池や砂山は消滅した。宅地造成や道路整備のために砂の需要が増加し、砂山は土建業者に売られ、池は建設業者等のごみ捨て場になった。
- ・共有地を守るため、昭和55年に北山池共有地組合が池をきれいに整備した。そのような経緯もあり、北山に住む者として「北山池は先人の残してくれた宝」だと思っている。
- ・北山池はひょうたん池、兄弟池とも呼ばれ、小さいほうが兄池、大きいほうを弟池と呼んでいた。小さいほうをグランドとして整備し、大きいほうを池のまま残した。
- ・昭和56年に北山池（弟池）2.6haとグランド（兄池）0.4haを新潟市に寄贈し、1984（昭和59）年に新潟市の北山池公園として開設。北山池畔に共有地組合員による寄贈記念碑が建つ。
- ・現在の北山池の水は亀田郷土地改良区の農業用水。春から夏にかけては流入があるが、秋以降は流入がない状態。流出は排水口を通じて新潟市の排水溝に流れこむが、排水口が高い位置にあるため池の上水だけが排水される。雨が降ると湖面水位が上昇する。排水管を通して雨水路に排出される。
- ・池の底に泥が溜まっている。水深約1.5mで、泥の深さはその8割程度。水質改善のためには長い目でみればヘドロの除去が必要である。
- ・湧水、流入水などが無いため水質の悪化がみられる。市は噴水による曝気^{ぼっき}をおこなっている。北山自治会は井戸ポンプの設置を要望したこともあるが却下されている。
- ・池のまわりは鉄の矢板、コンクリートの護岸のため、マコモやヨシは生えていない。再整備の時は、池の自然を取り戻すためにもとに戻したい。
- ・ここ2～3年でハスの花が増えてきた。平成2年頃は池の水面85%位がハスの花で埋まった。平成5年頃に全滅。ヒシも広がってきているが、現在、ヒシの実を採って食べる人はいない。
- ・ヘラブナ釣りの客が日常的に20人程度おり、釣りのできる池として憩いの場となっているが、水質悪化につながる撒き餌の問題について懸念している。
- ・池の魚は放流したヘラブナが主である。平成20年に業者によりブラックバスが放流された。駆除を試みたがまだ生息しており、ブルーギルも含め、外来種の対策をしなければいけない。以前に生息していたエビや小魚はほとんどいない。
- ・北山池の主は「たん貝」との伝説がある。60年以上前は大きな貝がたくさんいたが、今は少ない。コイ、ライギョ、エビ、カニ、亀もほとんどみられない。
- ・今後の北山池の課題としては、池の水質改善、ヘドロの除去、池の周囲のコンクリート護岸をより自然なかたちに整備し直すこと、釣り客の撒き餌の問題への対策や外来種の駆除があげられる。

新潟市潟環境研究所 平成27年度第4回定例会議（概要）

日時：平成27年11月19日（木）午後2時～午後5時15分

場所：じゅんさい池及び東区役所会議室

■会議概要

1 報告及び情報提供

- ・「潟の魅力創造市民活動補助金」について（水と土の文化推進課）
- ・「赤塚中学校 地域の作品展示会」について（太田研究補助員）

※講義の前に、10年以上じゅんさい池の自然環境・生物保全にかかわっている当研究所の井上信夫研究補助員より、じゅんさい池の自然についての説明がありました。

「じゅんさい池の自然 現状と課題」について（井上 信夫 研究補助員）

- ・じゅんさい池公園は市街地に残された貴重な自然であり、野生生物の生息空間としても重要な存在である。しかし、昨今は外来種（オオクチバス、コイ、ミシシippアカミミガメ、園芸スイレンなど）の侵入が、在来種の生育・生息に大きな影響を及ぼしている。

- ・例えば、2004年まで観察されていたタヌキモは現在観察することができない。その理由として、雑食性のコイ（飼育されていた個体）による食害や、競合する外来植物（ハゴロモモなど）の繁茂による影響が考えられる。
- ・一方で、人が持ち込んだ外来生物による影響だけでなく、人自身の行動も生物種に大きな影響を与えている。2014年まで生息が確認されていたオオタカは、今年から確認できなくなった。これは、観察者の過度な接近により、オオタカの生息空間を圧迫したことが原因の一つであると考えられる。じゅんさい池公園では今後、在来動物を守り育てるための対策を考えていく必要がある。
- ・じゅんさい池公園は全国的に見てもめずらしい、砂丘上にある水辺を中心とした都市公園である。遊具があつて遊べるような普通の都市型公園ではなく、その自然環境を生かした、学ぶことのできる都市公園として維持管理していくのがよいのではないか。

2 講義

「都市における公園の在り方 都市型公園の小金公園と自然型公園のじゅんさい池公園のかかわり方」

五十嵐 初司/東山の下地区コミュニティ協議会・じゅんさい池公園を守る会

- ・東山の下地区コミュニティ協議会が維持管理にかかわっている公園は、小金公園（松和町）とじゅんさい池公園である。
- ・小金公園は地域の防災拠点として市の一時避難場所に指定されており、前年度、コミ協でも防災の基幹公園として位置づけた。
- ・コミ協は普段、小金公園の清掃管理を行っているが、今年は、一時避難場所として地域住民に広く認知してもらうことを目的とし、東山の下フェスティバルも開催した。
- ・じゅんさい池公園もまた、大規模災害時の避難場所、広域避難場所として指定されている。しかし、こちらも地域住民へ周知されているとはいえない。実際に災害が起きた際、果たして本当に避難できるのか、という懸念があった。この防災の観点がきっかけとなり、じゅんさい池公園へのコミ協のかかわり方について、改めて模索するようになった。
- ・じゅんさい池公園は砂丘湖を中心とした多くの生物種の生育・生息場所であることから、それにかかわるたくさんの組織・団体が現地で活動を行っている。
- ・地域のコミュニティ協議会だけがかわっている小金公園と異なり、じゅんさい池公園では、コミ協、ボランティア、公園利用者等、立場の異なる団体、人々が数多く存在するため、公園利用についての意見の統一が難しかった。
- ・そこで、じゅんさい池公園そのものの在り方、方向性について検討していく前段階として、様々な意見を吸い上げる場をつくることを目的に、平成26年4月17日に「じゅんさい池公園を守る会」を設立した。いずれは拡充できればと考えているが、まずは東山の下地区コミュニティ協議会の環境衛生部会のメンバーが主体となって、活動を始めたところである。
- ・じゅんさい池公園のあり方と今後の方向性を決めていくにあたって、現在、じゅんさい池公園にかかわっている団体だけでは専門知識が十分でないので、まちづくりや公園整備、生物・環境保全等、それぞれの専門家の方からアドバイスを聞いていきたい。
- ・昨年度、今年度と実施している「じゅんさい池公園ニセアカシア伐採及び赤松植林事業」は、東区役所と東山の下地区コミュニティ協議会（じゅんさい池公園を守る会）の協働事業である。伐採木は産業廃棄物として出してはいけないといった取り決めもあり、個人利用のストーブや地域の災害時用の薪といった、伐採木の有効的な利用方法をコミ協から提案した。
- ・小金公園やじゅんさい池公園は東山の下地域のオアシスであり、コミ協としては、日常的な活用と維持に努めたいと考えている。しかし、じゅんさい池公園のあり方について考えるには、スタートラインに立ったばかりである。植林事業のような具体的な投げかけがあると、自分たちの役割を認識することができ、それに応じた行動に移すことができるためありがたい。
- ・現在は行政主体だが、行政とコミ協が協働してじゅんさい池公園の維持管理を行っていくのが理想と考えている。

今回の定例会議では、中村忠士さん（じゅんさい池公園を守る会）による案内のもと、じゅんさい池公園の現地見学も行いました。



東池で解説を聞く様子



西池にある上道神社裏でのアカマツ植栽



池の植物を調査



西池で採取したジュンサイの冬越しの芽

新潟市潟環境研究所 平成27年度第5回定例会議（概要）

日時：平成28年1月28日（木）午後3時～午後5時15分

場所：新潟市役所第1分館101会議室

■会議概要

1 報告及び情報提供

- ・「潟シンポジウム」（2/20）について（水と土の文化推進課/潟環境研究所事務局）
- ・「雁と白鳥シンポジウム」（2/28）について（水の駅「ビュー福島潟」）
- ・「とやの潟ウィンターキッチン」について（新潟市南商工振興会）
- ・仙北平野湖沼群視察報告（大熊所長）

2 講義

「松浜の池～砂山に立てば、阿賀野川河口と日本海、さらに飯豊連峰を一望できるオアシス～」

加藤 功/新潟映像制作ボランティア副代表

- ・松浜の池は地元では、とんぼ池、ひょうたん池とも呼ばれている。阿賀野川右岸、海岸より約100メートルのところにあり、長さ約400メートル、幅90メートルの大きさの河口閉塞湖である。
- ・今年度に入ってから、松浜地区コミュニティ協議会との協働で、松浜の池の成り立ちと、池の水深及び面積、池の形状変化について調査を行っている。

【池の成り立ちと形状変化について】

- ・松浜の池付近の昔の地形図を見ると、明治・大正頃、このあたりは砂山と荒地（湿地）が広がっていたことがわかる。これはあくまで仮説であるが、大正末～昭和初期にかけて新井郷川を開削したことをきっかけに水脈に変化が生じ、窪地に湧水が溜まって池となったのではないかと考えている。
- ・昭和初期では入り江で阿賀野川と通じていたが、昭和48年頃、阿賀野川の土砂によって入り江の口が閉塞され、現在の形になったと思われる。これ以降、大きさが若干小さくなっているものの、池の形状に大きな変化はみられていない。

【池の面積と水深、水面標高について】

- ・松浜の池の面積について、今回GPSを使った電子測定の結果、約2.2ヘクタールであった。これまで地元では約2.6ヘクタールと認識していた。池の面積は若干減少傾向にあると考えられる。
- ・池の水深は魚群探知機を使って測量し、そのデータをもとに、水深分布を表した。すると池の水深50センチくらいは池の水際から1メートルくらいのところまでの狭い範囲であり、それ以降は急激に深くなるのがわかった。最も深いところで、約1.7メートルの水深があった。
- ・池を調査した11月3日午後2時の水面標高（TP）は約0.75メートルであり、当時の日本海（0.47メートル）や阿賀野川の水面標高（0.48メートル）より約30センチ高い位置に松浜の池が存在することがわかった。

【池の塩分濃度について】

- ・阿賀野川の洪水時、川の水位に変化はあっても松浜の池の水位に大きな変動はない。さらに、池に生息・生育している魚類や水生植物、新潟市が測定している塩化物イオン濃度をみると、松浜の池は淡水であることがわかった。

【今後松浜の池でやっていきたいこと】

- ・河口閉塞湖は全国にあるが、大半が川を通じ海とつながっている。松浜の池は、海岸から100メートルしか離れていないにもかかわらず淡水池として独立している池は全国的にまれである。さらに貴重な動植物が生息・生育している松浜の池は、今後も調査・研究を継続していく必要がある。
- ・今後は、水中カメラを使った池の中の湧水場所の特定、地元での聞き取りと写真などの情報収集、地元の方への調査報告会を開催する予定である。

【松浜の池と松浜地区コミュニティ協議会地元学部の活動について】

村山 和夫/松浜コミュニティ協議会地元学部会長

【松浜地区コミュニティ協議会地元学部について】

- ・2005年に松浜地区コミュニティ協議会が設立された後、地元にあるものに光をあて、それを守っていくために、2007年コミ協内に地元学部会ができた。地元学部会では、地域の食材を使ったお菓子の試作品をつくったり、松浜小唄の保存活動をしているほかに、松浜の池（ひょうたん池）の環境整備活動を行っている。

【松浜の池の昔と、池での活動状況について】

- ・50年以上前、自分が子どものとき、松浜の池は「池」ではなく入り江であった。阿賀野川の出口、海側にある港に行く時は、最短距離である入り江の口を歩き、シジミといった貝類を採ったり遊びながら向かった記憶がある。そのころは子どもが歩けるくらい、水深が浅かった。新潟地震が起きた1964（昭和39）年もまだ入り江だったと記憶している。
- ・1994（平成6）年から1995（平成7）年くらいに漁港の改修工事の話があり、ヨットハーバーにしようという話もあった。しかし、これらの話は実現しないままに立ち消えた。ただ、それが実現しなかったからこそ、現在の池が残っている。
- ・松浜の池は1997（平成9）年、第8回全国トンボ市民サミットの会場の一つになったが、現在もオオモノサシトンボ、オオセスジイトトンボといった絶滅危惧種のトンボがみられる、貴重な水辺空間である。しかし、地元の住民でも池の存在を知らない人が多いため、松浜の池への案内看板・池の紹介看板を設置、池を一望できる展望スペースを設けた。
- ・2011（平成23）年の3月から阿賀野川堤防耐震対策事業が始まり、工事のための足場として、池を半分ほど埋めなければならなくなった。その際は国土交通省や業者と話し合いを行い、池の自然環境に影響がないように工事を

進めてもらった。

【現在の生物相について】

- ・2015（平成27）年3月に工事が終わったあと、池も元通りにしてもらったが、トンボ類や、魚類、植物に影響がなかったかと心配していた。しかし、2015（平成27）年6月、松浜小学校の3年生の総合学習で観察会を行った際、オオセスジイトトンボを確認でき、さらに7月末に実施した地域の人を対象にした観察会では、6月に確認できなかったオオモノサシトンボを確認できた。また、7月は非常に多くのオオセスジイトトンボを確認することができ、これくらいいけば、絶滅することはないだろうと安心した。
- ・現在、池にはエビ類の他にライギョやフナ、そしてメダカが繁殖している。ブラックバスは釣りあげられてほとんどいないが、最近ではニシキゴイを確認した。誰かが池に放したのだと思うが、こういった行為は規制されていないため、今後具体的に池の保全を考えると、この対策についても考えていかなければならない。大事にしていくために、どういう形で保全していくことができるか、考えていきたい。

【今後について】

- ・個人的には松浜の池は、有名にならないほうがいいのかとも思っている、色々な人が来るようになるとごみも増え、環境が変わってしまうのではないかという不安がある。松浜の池は知っている人が知っていて、展望スペースのベンチに座って池を眺められるような、ゆっくりとした時間を楽しめるような場所になればいいと思う。

※講師の大谷さんからは、潟に関連した黒埼地域の歴史や地名の由来などについて、ご講義いただきました。

【郷土の歴史から見えてくるもの～川切れの痕跡を残す水戸際池～】

大谷 一男/黒埼南ふれあい協議会会長・木場の郷土を愛する会代表

【近世における自然災害と自然破壊】

- ・地名は土地の目印、人と人との共通に使用する符号として発生したものである。金巻の池というのは池の地籍にちなんだ名前であり、地元木場ではあまり使われていない。所有者の家の屋号に由来した「山佐池」、諏訪神社の池のほりにあることから「宮池」などと呼ばれている。昔は農業用水池として使用していた。
- ・川の土手が切れ、水が急流のように流れ入るその切り口を水門（みーと・水戸）というが、その際にある池という意味の「水戸際池（みとわいけ）」が、本来の名称である。
- ・落堀は、過去の洪水による破堤の際に流水によって浸食されてできた凹地で、池として残っているものをいう。旧黒埼町でも、野端切れ、諏訪堂切れ、供養塚切れ、木場切れ、金巻切れ、大野切れ、柳作切れといった川切れによる落堀が多く残っていた。しかし、現在も残っているのは、天明年間（1781～1789）と1863（文久3）年に起きた「木場切れ」によってできた金巻の池だけである。

【「場・潟・津」に共通する越後平野と濃尾平野】

- ・地名からは、その土地の歴史をたどることができる。越後平野と、岐阜県南西部から愛知県北西部にかけて広がる濃尾平野は地形の成り立ちがよく似ているが、地名についても共通性をもっている。例えば黒埼地域で「木場」のような「場」のつく地名は、濃尾平野でも多く確認されており、墾田に由来した名称であると考えられる。
- ・また、越後平野には過去多くの潟が存在したことから、その潟の名称に由来した「潟」とついた地名が多い。さらに古津、新津といった「津」は内湾の船着き場としての港を意味した地名である。

【木場城と米沢上杉家之藩山吉家伝記】

- ・木場集落の周りは、古くから田潟、大潟などをはじめ大小の潟湖に囲まれていた。上杉景勝と新発田重家の戦いにおいて、上杉景勝の前線基地として使われた木場城もまた、潟湖の地形を利用して築城した水城であった。

【水戸際池伝説（八郎のオジ）】

- ・最後に、金巻の池に残る伝説、「水戸際池の伝説」を紹介する。これは、「村の泥棒の嫌疑がかかった男を中ノ口川に投げ込んだ後、大雨によって洪水が起きて村が流されたことを、その男のたたりとして恐れた」という伝説である。これは、時代背景に矛盾も多いことから、水害を恐れた一種の怨霊伝説、説話の類いではないかと考えている。

新潟市潟環境研究所 平成27年度第6回定例会議（概要）

日時：平成28年3月24日（木）午後3時～午後5時15分

場所：新潟市役所第1分館101会議室

■会議概要

1 報告及び情報提供

- ・「潟シンポジウム」（2/20開催）報告（潟環境研究所事務局）
- ・「雁と白鳥シンポジウム」（2/28開催）報告（水の駅「ビュー福島潟」）
- ・「福島潟たより2016春号」について（水の駅「ビュー福島潟」）
- ・北上の池、六郷ノ池視察（2/26）報告（潟環境研究所事務局）
- ・平成28年度の定例会議について

2 平成27年度の総括として

講義「魂の還れる自然とこれからの新潟の潟」 大熊 孝 潟環境研究所所長

- ・日本人の伝統的自然観に、「山川草木悉皆成仏（やまかわそうもくしっかいじょうぶつ）」という言葉がある。この言葉は、自然の中のあらゆるものは、“いのち”の連鎖の中で、最後は土と水と大気に還る、平等な存在であることを示している。日本人の自然に対する思想は、「自然の利用」や「自然の克服」、「自然保護」、「自然との共生」ではなく、本来、「自然に還る」ことにあった。
- ・新潟の「潟」の風景はとても美しく、鳥たちが還ってくる場所であるとともに、我々も「還りたくなる風景」であり、精神が癒される場所である。
- ・福島潟の堤防は、治水計画のなかで、ビュー福島潟の建物と潟来亭のある場所と一体的になるように、造られた。もともとの計画では、堤防によってビュー福島潟と潟来亭が分断される予定だったが、潟来亭のある場所からならぬ堤防が造られた。堤防を含むこの景観は誇るべきものである。
- ・上堰潟は西山川、広通川、新川を通して海とつながっている。松野尾コミュニティ協議会協力のもと、松野尾小学校の全校児童94人が西山川でのサケ稚魚放流に参加した。
- ・鳥屋野潟では、潟の水深を今より深くすることにより、競技用ボートコースを設置することが可能になる。国際大会が開催できるようなA級ボートコースの設置も、今後の潟の利活用の一案として考えてもよいのではないか。そのためには、鳥屋野潟のヘドロの問題、洪水調節容量の問題を解決する必要がある。
- ・北海道出張（3月14日～16日）の報告。2015年3月完成の舞鶴遊水地（面積200ha、洪水調整容量820万 m^3 、内水調整池容量120万 m^3 、標高4.1m）を視察した。1999年に千歳川放水路計画が中止になり、遊水地群をつくる計画に変更され、遊水地にたくさんの鳥が戻ってきている。
- ・ウトナイ湖（面積275ha、平均水深0.6m）は1991年、日本で4番目にラムサール条約登録湿地に、宮島沼（面積25ha、平均水深55cm）は2002年に指定された。北海道は13のラムサール条約登録湿地がある。
- ・ワイズユースの観点からいえば、新潟の「潟」では、歴史的にワイズユースがおこなわれてきた。人と湿地との関わりということでは歴史があり、越後平野のポテンシャルは高いと考える。
- ・新潟市のラムサール条約登録湿地には佐潟がある。将来的に、鳥屋野潟、福島潟が登録されるとすると阿賀野市の瓢湖を含め、「越後平野ラムサールカルテット」と呼ぶことができるだろう。
- ・また、「ラムサール都市・新潟」と言ってもいいほど、越後平野には白鳥もくるし、朱鷺も来ている。
- ・2018年に、ラムサール条約締約国会議がドバイで開催される。その時までには福島潟が登録されることを期待している。

潟環境研究所ニュースレター

Wetland Environment Research Laboratory

第 3 号 2015年7月

潟の魅力と価値を再発見・再構築。
潟と人とのより良い関係を探求



花で飾られた遊覧船が進む様子
「とやの潟環境遊覧2014」より 撮影：加藤 功氏

- ・新潟市潟環境研究所公式サイト
「潟のデジタル博物館」開設！ …… P. 2
- ・ミニ知識～知ッテタ？カタ？カタ？…… P. 2
- ・素顔の潟スナップ…… P. 3
- ・潟食クッキング…… P. 3
- ・潟のエッセイ「田んぼで魚とり」…… P. 4

「潟の真ん中体感」の、とやの潟環境遊覧による潟活用の展開へ

相楽 治／新潟市南商工振興会事務局長・とやの潟環境舟運実行委員会2015委員長

とやの潟環境遊覧のねらいの1つに、「まちの真ん中（都心）で水辺とふれあいながら暮らせる潟の豊かさの復元・創造の動機づけ」があります。

2014年は、潟の真ん中でとやの潟＝“海”である魅力を体感してもらうことと、地元の高齢者が潟ガキだった頃の記憶話でガイドしてもらうことを期待しつつ開催したところ、2日間で計1100名に乗っていただきました。その様子はYouTubeに動画で公開しています。10団体の実行委員の連携・協働での舟運とガイド情報など、初めての試みの成果が経験知として共有できました。

2015年は、7月18～20日の3日間に、「潟再生活用の可能性を探る」というテーマで、潟ガイド付きでの23人乗り遊覧船や板合わせ舟の乗船体験、8人乗りEボートや2人乗りカヌーの操船体験などを行います。

鳥屋野潟では、治水・安全や自然環境、潟の歴史などの調査・研究に多くの力が注がれていますが、潟と人、潟と地域など「活用」から「魅力」再生へ向けた、潟の経済的、社会的、都市的価値の再評価研究が不十分だと思っています。鳥屋野潟は、他の潟と違い、貸ボートやヨット、桜まつりなどのレジャー利用、漁業などの利用と周辺の住宅開発が一体化していた“都市の潟”です。潟の、見える資源と隠れた資源を活かし、豊かな「とやの潟ブランド」として次世代に渡すことが最大の戦略課題です。

また、「潟」再生とブランディングのプラットフォームにするという目的のもと、鳥屋野潟の魅力を発信するポータルサイト「TOYANOGATA.jp」も開設したので、ぜひアクセスしていただければ幸いです。



とやの潟環境遊覧2014で潟のガイドをする
新潟市南商工振興会会長の村尾建治さん

※潟環境研究所では、調査・研究の成果などの情報を共有し、関係者間の連携を図るため、定例会議を開催しています。上記は、ことし5月の会議内容の一部です。



とやの潟で船に乗ってみよう! 2015

とやの潟の真ん中に行ってみると、まるで海の上にいるみたい! そんな感動を味わえるイベントです。遊覧船体験のほかにも、カヌーやEボート、板合わせ舟など、水と親しめるイベントがいっぱい!

日時 7月18日(土)・19日(日)・20日(月・祝) **運行時間** 9:00～16:00

場所 新堀排水路河口 (中央区清五郎 産業振興センターといくとびあ食花の間)

受付 当日直接受付会場 (いくとびあ食花 キラキラマーケット前) へ **環境協力費** 300円/1人

問合せ とやの潟環境舟運実行委員会事務局 (025-257-0015 (有)トーゴスタジオ内)

新潟市潟環境研究所公式サイト「潟のデジタル博物館」開設！

新潟市内に点在する「潟」(湖沼)に関わる資料や情報をまとめた「デジタル博物館」です。「潟」に関する情報を「知る」「楽しむ」「調べる」の3つのキーワードでわかりやすくお伝えしています。

知る

潟とは何か?から、新潟市内に点在する16の潟(湖沼)を紹介。

楽しむ

潟に関係するイベントや活動、施設を紹介。

調べる

2,500種類以上の潟に関わる資料を掲載。

新潟市 **潟のデジタル博物館**
 NIIGATA City Wetland Digital Museum

<http://www.niigata-satokata.com/>

潟のデジタル博物館 検索



ミニ知識 知ッテタ?カタ?カタ?

潟端に生えている植物の「ヨシ」。かつては、屋根草やヨシズ材料、燃料や肥料など、生活のあらゆる場面でも使われていました。今回は、福島潟近くに住む地元の方から、子どもの頃に作って遊んだ「ヨシ笛」の作り方を教えていただいたのでご紹介します。

- ① ヨシは幅が広いものを選びます。
- ② 葉の下のほうから、このくらいの幅でくるくる巻いていきます。少しずつずらしながら巻いていくのがポイントだそうです。
- ③ 巻き終わったら、端をつぶして角をたてます。
- ④ つぶしたほうをくわえ、息を一定の強さで吹きます。音の鳴る位置を探してみてください。「ブー!」と大きな音が鳴りますよ。

素顔の「潟」スナップ <3>

7月18日(土)～10月12日(月・祝)を会期として「水と土の芸術祭2015」が開催されます。

今回は、「潟」をメインフィールドとしてプロジェクトを展開します。そこで今号では、メインフィールド(鳥屋野潟・福島潟・佐潟・上堰潟)とサテライト(清五郎潟)となる5つの潟についてご紹介します。

きたた 佐潟(西区)



佐潟散策のほか、佐潟近くの赤塚史跡を、ボランティアガイドの案内で巡るのもおすすめです。

ふくしまがた 福島潟(北区)



潟先案内人が一緒に散歩しながら福島潟の自然や動植物などについて教えてください。

うわさきがた 上堰潟(西蒲区)



景色もよく、1日のんびり過ごせる潟です。8月には「わらアートまつり」も開催されます。

天寿園のそばにある潟です。園内から潟の様子を見ることが出来ます。

水と土の芸術祭

まちなか／ベースキャンプ周辺

水と土の芸術祭

ベースキャンプ(旧二葉中学校)

水と土の芸術祭

サテライト(天寿園/いくとびあ食花)

せいごろうがた 清五郎潟(中央区)



とやのがた 鳥屋野潟(中央区)



芸術祭期間中に、潟舟体験できる機会があります。ぜひ潟舟に乗って潟の広さを実感してみてください。

水と土の芸術祭

Water and Land Niigata Art Festival 2015

ガイドや潟舟体験などの詳細は下記ホームページへ。潟を巡りながら芸術祭を楽しみましょう!
水と土の芸術祭2015 ホームページ <http://www.mizu-tsuchi.jp/>

潟食クッキング

② ヒシの実

美しく豊かな自然が残る潟は、食の宝庫でもあります。

今回は、「ヒシの実」について、前号に引き続き、食文化研究家の丸山久子さんから、教えていただきました。

「ヒシの実」は、最近、滋養強壮や健胃効果がある漢方薬膳の食材として、あらためて注目されています。

ヒシは潟に自生する一年草で、その実は、子どものおやつやおつまみとして食べられていたほど身近な食材でした。ヒシのの実の外皮はとても固く、アクが強いですが、中の実はゆでると、ほくほくとクワイに似た味でおいしいです。

今回は、下処理の方法と料理例をご紹介します。

【下処理の方法】

- ① アク抜きをする。鍋にたっぷりの水と水に対して3パーセントの量の塩を加え、水からゆでる。
・おつまみやサラダの場合：約15～20分
・煮物、炊き込みご飯など再加熱する料理の場合：約7～10分
- ② ゆで終わったら、そのまま一晩置いておく。(ひたした水は真っ黒になる)
- ③ 皮をむく。(ゆでても皮は固いので、皮むき用具やナイフの刃先、パンチなどを使う)

【料理例】

- おつまみ・おやつとして…
塩ゆでにしたものを半割りにして食卓へ。各自が皮むきを楽しみながら食べる。(香草塩などを添えて)
- サラダのトッピングとして…
ゆでたヒシの実を荒く刻み、お好みのサラダにちょっとトッピング。
- 五目炊き込みご飯として…
貝柱、油揚げ、人参、シイタケといったお好みの具材に、調味料を加え、ヒシの実(1人分の目安5個程度)と一緒に炊き込む。
- 炒め物として…
鶏肉などととも炒め、中華風に味付けても、ヒシのの実の独特の味を楽しめます。



皮付きのヒシの実(上)と
アク抜きをして皮をむいたもの(下)

「潟」のエッセイ

③ 田んぼで魚とり

森 行人 外部相談員／新潟市歴史博物館 学芸員



「田んぼにタツベを仕掛けにいく子ども」
昭和30年代半ば。斎藤文夫氏 撮影



「田んぼで魚とり」展でさまざまな漁具を展示

この春、新潟市歴史博物館（みなとびあ）では、「田んぼで魚とり」展を開催しました。田んぼや用排水路の堀などで行われた農家の漁労をテーマとする企画展です。

開催にあたり、昭和20年代前後に市内で子ども時代を過ごした方々に、魚とりの話を伺ったところ、皆さん顔を輝かせて熱心に語ってくださいました。魚が潜む場所への網の入れ方、魚の追い込み方、魚がかかった仕掛けをあげる時の高揚感など、手振りを交えて語る様子に、その楽しさが伝わってきました。とった魚はおかずにしたり、売って収入にしたりしたといい、魚とりは語り手の生活の一部となっていたようです。

田んぼに魚がいて、魚をとるという話自体、現代の私たちにはあまりなじみがありません。田んぼとは米を作る場所であり、稲以外のものはできるだけ排除して、生産性を高めるものと思いがちです。しかし、かつての田んぼでは、稲を育てる傍ら、田んぼや堀に入り込む魚をとったり、エサをとりにきた鳥をとったり、さらにはイナゴをとったり、畦で豆を育てたりしました。大規模な動力排水機や農業機械がなく、圃場整備も行われていなかった時代には、田んぼやその周辺の堀の構築と維持に多くの時間と労力が必要でしたが、一方では、田んぼや堀はさまざまな動植物が存在する環境であり、稲作以外の生産活動も行われる場でした。

また、「田んぼで魚とり」を考える上で、重要になるのが地理的な特質です。新潟市域は、越後平野の中央、信濃川・阿賀野川の河口部から流域に沿って広がり、平坦で海拔が低い地理的特徴を持ちます。村々の田んぼや堀は、河川とその幾筋もの支流や大小の湖沼とつながり、これらの水系はさらに河口部の汽水域とも接点を持っていました。これらの水域にはさまざまな魚がいて、行き来して産卵やえさ取り、越冬をするものもありました。かつてはフナやドジョウ、ナマズ、コイなどの魚が、田んぼやその周辺の堀に入り込み、こうした多様な魚が漁労の対象となったのです。たとえばドジョウは広く市域の田んぼに生息し、特産品として県外にも出荷されるほどでした。ドジョウをとるには、「ツツ」や「タツベ」などと呼ぶ、竹製のカゴを田んぼに仕掛けたり、堀では、「ガチャ」と呼ぶ、音を出す道具を使って追い込み漁を行ったりしました。農閑期になると水を湛えた湿田は漁場になり、畦がわりのヨシの根元に寄り集まったフナやコイを、舟に乗って網や手でとることができました。

現代の整備された田んぼを見て、こうした営みを想像することは難しくなりつつあります。しかし、魚とりの記憶は、かつての田んぼと人の多様な関わりを示すものであり、環境と人の関わりを考える契機となるでしょう。



「ドジョウツツ」
ドジョウをとる道具で、タツベなどとも呼ぶ

新潟市潟環境研究所について

本市には、地域の暮らしに根差した「里潟(さとかた)」ともいべき個性豊かな潟が多く残っています。

当研究所は、これらの潟について、その魅力や価値を再発見・再構築するとともに、潟と人とのより良い関係を探求するため、平成26年4月に発足しました。

潟に関わる多くの皆さまと連携しながら、自然環境や歴史、暮らし文化などについて、調査・研究を進めています。



発行

平成27年7月

新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務局

〒951-8550

新潟市中央区学校町通1-602-1（市役所本館4階）

☎ 025-226-2072

fax 025-224-3850

e-mail kataken@city.niigata.lg.jp

URL <http://www.city.niigata.lg.jp/shisei/kataken/index.html>

Facebook
ページ



潟環境研究所ニュースレター

Wetland Environment Research Laboratory, City of Niigata

第 4 号 2016年2月
新潟市

潟と人とのより良い関係を探求し、
潟の魅力と価値を再発見・再構築。

「上空から見た佐潟」 撮影：王毅氏

- ・越後平野4潟の魚類相…………… P.2
- ・「潟の記憶」を求めてあるく・きく・とる… P.3
- ・鳥のくらしと水辺の環境…………… P.4
- ・宮城県仙北平野のラムサールライアングルを視察して… P.6
- ・素顔の「潟」スナップ・漁食クッキング・知っテタ?カタ?カタ?… P.7
- ・潟のエッセイ…………… P.8

佐潟ラムサール登録20周年に寄せて

涌井 晴之 潟環境研究所外部相談員／佐潟と歩む赤塚の会代表

佐潟は今年ラムサール条約の登録湿地となって20周年を迎えます。1971年にイランのラムサールという町で国際会議が開かれて、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」が決定されました。

日本は1980年に同条約に加入の際に釧路湿原を登録。佐潟は1996年、日本で10番目の同条約登録湿地となりました。現在、国内の登録湿地は50カ所まで増えて、県内では佐潟と、福島県・群馬県にもまたがる尾瀬、瓢湖が登録されています。登録認定を受けて当時の新潟市長、長谷川義明氏は「保全に万全を期して、後世に継承していきたい」と話しました。

2006年12月に10周年を記念して「鳥がたなぐ潟と人」と題してフェスティバルが開かれました。私も地元の団体として実行委員会に参加しました。この中で3つの潟の発表として佐潟、福島潟、鳥屋野潟での保全などについて報告が行われました。佐潟で取り組んでいるドロ上げ、ヨシ刈りの潟普請について報告しました。翌日、赤塚の会場で開かれた「KODOMOラムサール湿地交流」では赤塚小学校の児童をはじめ東北・関東地方の登録湿地の地元児童らによる日頃の活動発表が行われました。「湿地は命の源、みんなの宝 大事に守って次の世代へつなげよう」とのメッセージが採択されました。「先人が地域の財産である佐潟を守り伝えたように、私たちはそのバトンを受け継ぎ、次の世代を担う子どもたちに引き継がなければならない」と呼びかけたことを思い出します。

条約では賢明な利用（ワイズユース）を提唱しています。ワイズユースとは湿地の生態系を維持しつつ、そこから得られる恵みを持続的に活用することです。地元では佐潟を通して立場を超えた交流が生まれ、地域づくりのアイデアへとつながっています。社会情勢の変化もあり、新たな人と潟の関係づくりが模索されています。佐潟が「里潟」として今後も10年、20年と市民と新たな水辺の関係づくりを築くために活動していきたいです。



潟普請で刈り取られたヨシを回収する参加者（2015年9月20日）

※市では、今年、ラムサール条約登録20周年を記念する事業を予定しています。今後、市報やホームページなどでお知らせします。



越後平野の中心部、新潟市に存在する主要な潟は、信濃川や阿賀野川の河跡湖であり、日本海ともつながっていました。まわりの水域との移動障害がなかったため、一生を湖沼や河川で過ごす純淡水魚のほか、海と往来する回遊魚や、河口域や沿岸部に生息する汽水・海水魚も加わり、豊かな魚類相を擁していました。

現地調査のデータや聞き取り情報を加えた結果では、これまで66種類ほどの魚類が確認されています。内訳は純淡水魚が41種、回遊魚が15種、汽水・海水魚が10種です。この中には、県内絶滅のゼニタナゴや、今ではほとんど見ることができなくなったニホンイトヨ（イトヨ）やトミヨ類も含まれています。

干拓によって多くの潟湖が姿を消し、農地の乾田化や治水事業による環境変化、持ち込まれた外来魚によって、越後平野の魚類相は大きく変化し、まるで違ったものとなりました。主な潟の魚類相の概況は下記のようになります。

◆福島潟

昭和36（1961）年、新井郷川排水機場が稼働、以後海産魚はほとんど見られなくなりました。過去の記録も含めて54種類が確認されていますが、外来魚が、21種を占めている点が注目されます。カジカ大卵型やアカザ、ホトケドジョウなど上流河川からの流下があるのも特徴的です。

◆鳥屋野潟

昭和23（1948）年、栗ノ木川排水機場が稼働、それまでは潮位の変化を受けて海水が侵入、多種類の海産魚が遡上してきました。現在30種前後が確認されていますが、20種類前後はまったく確認できなくなりました。

◆佐潟

周辺砂丘からの湧水はあるものの、砂丘列間のくぼ地に成立する「砂丘湖」とは成因が異なっている

ようです。潟環境研究所研究補助員の太田和宏氏によれば、「江戸時代中期には潟の出口に水門が設置された記録が残っている」とのことです。古い時代には、新川から広通江を通じて魚類の遡上があったと思われますが、それが絶たれて現在の魚類相は極めて単純です。12種が確認されていますが、うち7種は外来魚であり、放流のウナギを加えると、在来魚は4種しか残らないこととなります。

◆上堰潟

干拓事業により昭和50年代に完全に干上がり、その後湖底を掘り込んで遊水池を兼ねた公園として整備されました。過去の魚類相は不明ですが、現在18種が確認されています。非灌漑期には、新川～広通川～西山川を通じてサケの迷入もあります。

◀鑑潟▶

昭和41（1966）年、干拓によって消滅しましたが、干拓前の魚類相の記録が残っており、越後平野の魚類相の原型が見てとれます。県内絶滅のゼニタナゴ、市内絶滅のシナイモツゴやトミヨ類、希少魚種のアカザやカマキリ（アユカケ）、ホトケドジョウなど48種が記録され、コノシロやサヨリ、スズキ、ヌマガレイなどの海産魚も多数含まれています。外来魚11種も記録されていますが、終戦前後に持ち込まれた古典的な魚種がほとんどです。

表1 越後平野の湖沼で記録された魚類の生活史区分

生活史区分		該当種
純淡水魚 41種	一生を淡水中で過ごす (ウグイの一部は降海)	コイ・ゲンゴロウブナ・ギンブナ・タイリクバラタナゴ・オイカワ・ウグイ・モツゴ・タモロコ・ニゴイ・ドジョウ・シマドジョウ・ナマズ・キタノメダカ・オオクチバス・ジュズカケハゼ・カムルチー（ライギョ） など
回遊魚 15種	遡河回遊魚 8種	川で生まれて海で成長、川に遡上して産卵
	降河回遊魚 2種	海で生まれて川で成長、海に下って産卵
	両側回遊魚 5種	川で生まれてすぐに海に下り、短期間の後に川に遡上して成長
汽水・海水魚 10種	河口付近の汽水域で過ごすか、ふだん海水中で過ごして一時的に川に侵入	サヨリ・スズキ・シマイサキ・クロダイ・ボラ・メナダ・コノシロ・マハゼ・クサフグ など

表2 越後平野の湖沼に生息する魚類相の状況

確認状況	福島潟	鳥屋野潟	佐潟	上堰潟	鑑潟
○ 近年の確認情報あり	33	25	12	17	0
△ 稀な確認、迷入	12	5	0	1	0
▲ 近年確認情報がない	9	19	0	0	48
種数合計	54	49	12	18	48
(うち外来種)	21	17	7	10	11

備考：外来種には、国内外来、国外外来を含む

「潟の記憶」記録映像制作

昭和30年代以前、新潟の「潟」は、人の暮らしのすぐそばにありました。現在では都市の中の貴重な水辺となった潟。人は潟とどのように関わってきたのでしょうか。平成27年度は、潟端での暮らしの「記憶」を求めて、福島潟、鳥屋野潟、上堰潟、佐潟の近くで暮らしてきた、60歳代から90歳代の人々から聞き取りをし、また、現在の漁や採集活動の様子なども、映像で記録してきました。以下では、その中で見えてきた潟の産物とそれをめぐる人々の営みに注目してみたいと思います。



撮影の様子

潟でとれるもの

ヒシの実、ハスの実、ライギョ、フナ、コイ、エビ・カニ、雑魚。これらは私が潟を訪れる中で、潟端地域の皆さんからいただいたものです。一見、何もなさそうに見える潟で、食べられるものがこんなにあるのかと驚きました。しかも、実際に食べてみると意外においしいのです。



新鼻甲自治会が調理した「ハスの実とヒシの実のおこわ」



ハスの花の出荷作業。10本ずつ束にして、茎の長さを揃えて切り落とす。

福島潟では、近年、新鼻甲自治会が福島潟で採れたヒシの実やハスの実などを使った料理を作り、地域の催しで振る舞っています。これらは日常的に食されるものではありませんが、「食」から潟を知る良い機会になります。

他にも潟端の動植物はさまざまな形で、暮らしの中に利用されています。例えば、佐潟では、例年8月7日頃から13日までの間、赤塚地域の人々が早朝から舟をだし、ハスの花取りをしています。そこで刈り取られた花は、お盆期間に、近隣の商店で販売され、墓前や仏壇に供える仏花として使われます。

他にも潟端の動植物はさまざまな形で、暮らしの中に利用されています。例えば、佐潟では、例年8月7日頃から13日までの間、赤塚地域の人々が早朝から舟をだし、ハスの花取りをしています。そこで刈り取られた花は、お盆期間に、近隣の商店で販売され、墓前や仏壇に供える仏花として使われます。

の間、赤塚地域の人々が早朝から舟をだし、ハスの花取りをしています。そこで刈り取られた花は、お盆期間に、近隣の商店で販売され、墓前や仏壇に供える仏花として使われます。

潟の産物をめぐる人々の営み 潟は漁場だった

かつて新潟市内の潟は豊かな漁場であり、昭和40年頃まで、簀立てを用いた本格的な漁から、農家の副収入や子どもの小遣い稼ぎ、自給のための魚捕りまで、盛んに行われていました。

鳥屋野潟近くに住む90歳代のある農家の人は、農閑期に潟で漁をした経験があり、魚をはじめとする潟の産物は「いい小遣いになった」といいます。こうした語りからは、その当時、稲作や畑作と潟の産物の利用を組み合わせた暮らしがあったことがうかがえます。

小規模ながら福島潟、佐潟、鳥屋野潟では、いまでも漁をしている人々がいます。今回、鳥屋野潟漁業協同組合の皆さんに、刺し網や投網とあみを使った漁



鳥屋野潟でオウギアミを使う。舟の上から水中に網をいれ、前方から魚を追い込んでくる舟を待ち構える。



の実演、そして、かつて使われていた「オウギアミ」を用いた漁の再現をしてもらいました。全長5メートルもあるこの網は、潟や川での追い込み漁に使われていました。漁に携わる人が減り、潟の環境が変化していくなかで、使われなくなった漁具や漁法がいくつもあります。漁具や漁法は生息する魚類の生態、自然環境に応じて考え出されており、人が潟をどのように利用していたのかを知る手がかりとなります。

潟から生活の糧を得ていた時代を知る人は少なくなりました。しかし、子どもの時の経験、あるいは親や祖父母から伝え聞いた話を掘り起こすことで、かつての豊かな潟との関わり方が見えてくるのではないのでしょうか。潟端を「あるき」、出会った人々から「きき」、「とって」きた「潟の記憶」。潟端の営みとそれを支えてきた人々をもう一度見直し、将来の持続的な潟の利用につながるように伝えていきたいと考えています。

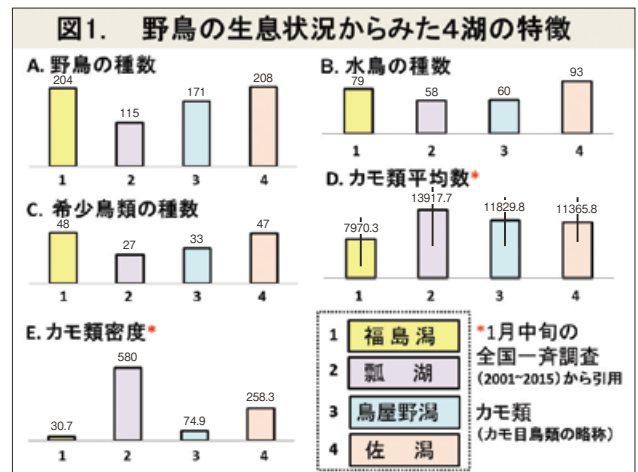


I. 自然環境と鳥相の概観

(1) 新潟平野の自然環境と4潟湖の特徴：新潟県は文字どおり「潟の国」です。悠久の流れを滙^たえて日本海へ注ぐ2つの大河（信濃川と阿賀野川）は、無数の水脈となって広大な新潟平野をかたち作り、多くの潟湖を生み出しました。人間活動はこの広い低湿地を広大な穀倉地帯に変え、大小の集落・都市を発達させてきたのです。幸いにも新潟平野に残ったこれらの潟湖は、今や水鳥をはじめ多くの動植物が生息・生育するかけがえのない身近な自然として大切な役割を果たしています。ここで紹介する4つの潟湖（福島潟、瓢湖、鳥屋野潟、佐潟）は、立地条件や自然条件に関して類似点と共に相違点（水面積の広さ、流入河川数、成因、周囲の景観・人為環境化の程度）が見られます（表1）。

(2) 野生鳥類からみた4潟湖の特徴：一般に、潟湖は野鳥の生息地として鳥相（一定地域に住む鳥類の全種とその特徴）が豊かで、冬を中心に生息密度の高い場所として知られています。いずれも日本の重要湿地や鳥獣保護区（事由：集団渡来地）に指定され、法制上も保護・保全が優先される場所になっています（表1）。野鳥の側から4つの潟湖を比べると、生息する種類や希少種の出現数が多い水辺は福島潟や佐潟で、次いで鳥屋野潟と瓢湖となります。一方、カモ目鳥類の個体数密度に注目すると瓢湖が抜きんでて高く、次いで佐潟、鳥屋野潟、福島潟の順となり、それぞれ自然環境の多様性や人工給餌の有無等を反映した特徴が認められます（図1）。

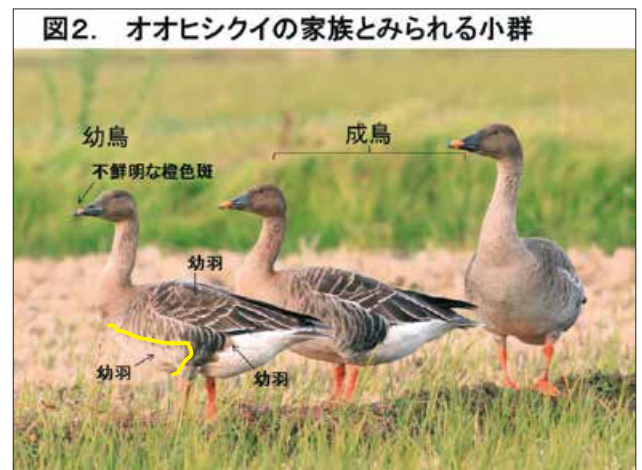
	福島潟	瓢湖	鳥屋野潟	佐潟
分類	潟湖	人造湖	潟湖	潟湖
水面積	260ha	13ha	158ha	44ha
水面標高	-0.7m	+8m	-2.5m	+4.5m
水深	1m	0.7m	1m	0.5m
水源	河川	河川	河川	湧水
(河川数)	(13本)	(1本)	(33本)	
日本の重要湿地500	指定	指定	指定	指定
鳥獣保護区(面積)	国指定(231ha)	国指定(281ha)	県指定(264ha)	国指定(251ha)
指定事由	集団渡来地	集団渡来地	集団渡来地	集団渡来地
ラムサール条約		2008年指定		1996年指定
天然記念物指定		ハクチョウ渡来地		



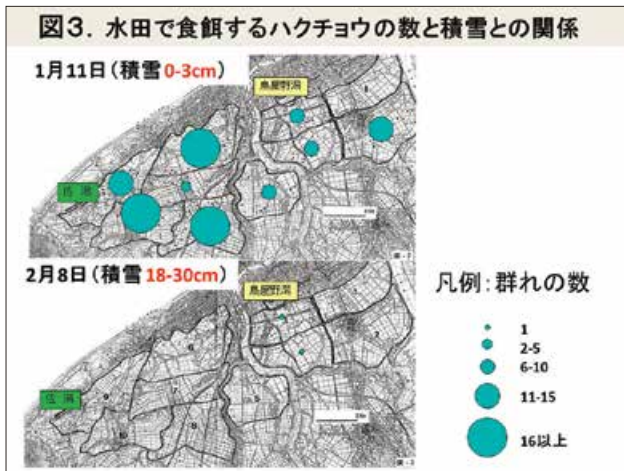
II. 大型水禽類の越冬生活

(1) 大型水禽類の名前：ハクチョウとガンは大型水禽類を代表する水鳥です。冬鳥として日本に渡来するハクチョウには生物学的に別種のオオハクチョウとコハクチョウがあり、後者については繁殖地の異なるアジア産コハクチョウと北米産コハクチョウが亜種として区別されています。なお、新潟県に渡来するガン類には、ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、ハクガン等の希少種がいます。

(2) ヒシクイ類の多様な姿と分類の変遷：ヒシクイは多形種（同一種の個体の変異に富む状態）で、その系統分類は長年研究者を悩ませ、分類体系も変遷してきました。日本ではヒシクイが3亜種（亜種ヒシクイ、亜種オオヒシクイ、亜種ヒメヒシクイ）が記録されていますが、DNA分析を加えた最近の成果によれば、亜種ヒシクイはそのまま、亜種ヒメヒシクイは別亜種ロシアヒシクイに包含され、亜種オオヒシクイ（図2）は別種オオヒシクイに格上げすべきであると主張されています。新潟平野にはオオヒシクイ以外に少数のヒシクイ別亜種が複数飛来することがわかっており、生物多様性や希少種保護の観点からそれらの形態や生態を解明し、DNAを比較検討することが重要な課題になっています。



(3) 越冬生活の概要とコミュニケーション：新潟平野は日本に渡来するコハクチョウの最も重要な越冬地の1つであり、個体数は最近数十年間で明瞭な増加を示しています。その背景には冬季における採食環境の改善や保護思想の浸透があり、埤（ネグラ）も潟湖中心に河川中州や湛水された水田（冬水たんぼ）へと広がっています。ハクチョウはペアや家族の絆が強く、これらを中核とした様々な規模の群れで埤（湖沼）と餌場（水田）を往来し、積雪状態にも応じた越冬生活を送っています（図3）。群れ生活は個体間の相互作用に因るもので、各種誇示行動と音声は、コミュニケーション手段として家族のまとめりや群れの動向を左右する重要な役割を担っています（図4）。

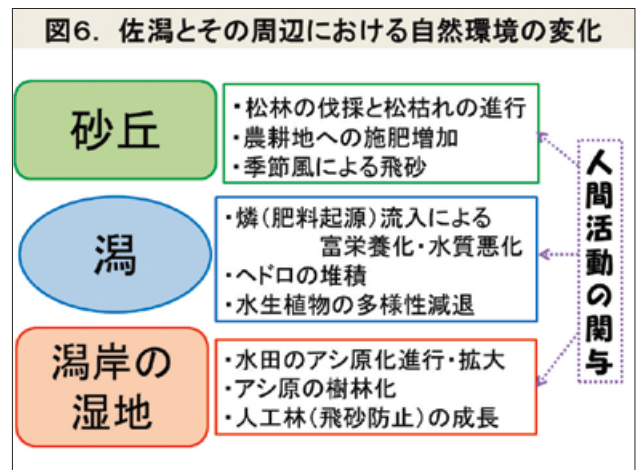


Ⅲ. 環境の変化と野鳥の暮らし

(1) 水田を利用する水鳥の餌生物：潟湖の周辺にある水田は水鳥類の餌場として利用される程度が高く、大型水禽にとっては特に重要です。ハクチョウとガンは冬季の水田を共通の餌場としていますが、口器構造の違いを反映した異なる方法で餌を食い分けしています。すなわち、前者は稲の落ち籾を主に濾過食し、後者は稲の再生稈等をかじり取っています（図5）。また、水田は年間を通じて様々な野鳥の餌場に利用されており、晩春から初夏の頃は、各種の小型動物（ドジョウ、巻貝、ヒル、ミミズ、昆虫類等）を求めてカモメ類やシギチドリ類が飛来し、これらを捕食して渡りのエネルギー源にしています。



(2) 佐潟での事例：1996年新潟県初のラムサール条約湿地に登録された佐潟では、潟での人間活動がしばらく減退した時期があり、周りの砂丘地における農業形態の変化とも相まって潟の自然環境が大きく変化しました（図6）。このため、劣化した潟環境の回復に向けて協議や実践活動が続いています。潟の沿岸ではヨシ原の拡大やブッシュの増加により、増えた鳥（ヨシ原と密接な関係を持つオオヨシキリやオオジュリン等の小鳥）や繁殖のために定着した鳥（アオジやウグイス）、さらに短期間繁殖した鳥（広い草地に営巣するタカ類の一種チュウビ）等がいる一方、かつて水田や水辺に普通にみられた鳥の中には、バン、タシギ、タゲリ等のように、大幅に個体数が減少したものもいます。



(3) 福島潟（湖岸の草地）での事例：福島潟では干拓による農地の拡大、農業構造の変化に伴う休耕田の増加と植生遷移、また、河川改修工事に伴う自然環境の攪乱等が相次いでいます。この間、湖岸の湿性草地では、希少種コジュリンの繁殖分布や個体数の変化（増加とその後の減少）、セッカ（小鳥）やセイタカシギの一過性繁殖等が観察されています。

終わりに：水辺における野鳥とその暮らしを俯瞰していつも感じることは、豊かな生態系にはそのシンボルとなるアンブレラ種（オジロワシ等）が息づいていることです。それらが継続して生息できるよう、関係者が知恵を出し合い、最善を尽くしていく必要があります。



佐潟は1996年3月にラムサール条約に登録されました。この2016年3月で20周年を迎えます。この間、阿賀野市の瓢湖が2008年にラムサール条約登録湿地になりましたが、新潟市の福島潟や鳥屋野潟は登録への動きはありませんでした。それはラムサール条約に登録されると、潟やその周辺の利用・整備ができなくなるという先入観があり、進展しなかったものと考えています。現実にはラムサール条約には、湿地とそこで生息する生き物たちが消滅しないかぎり、湿地の賢明な利用を図るという「ワイズユース」の考え方があり、潟の利用や人の生活を守るための整備に対する規制はほとんどありません。

仙北平野のラムサールトライアングル

ところで、越後平野と同じような低湿地帯である宮城県の仙北平野には近接してラムサール条約登録湿地が3か所もあり、「ラムサールトライアングル」と呼ばれています（図参照）。それを2015年12月初めに視察に行ってきたので、その報告を兼ねながら、今後の越後平野でのラムサール条約登録の方向性について考えてみたいと思います。



化女沼ダム（出典：宮城県「化女沼ダム」パンフレット）

仙北平野では、伊豆沼・内沼が1985年に国内2番目のラムサール条約登録湿地となり、その20年後の2005年に蕪栗沼（かぶりぬま）が、そしてその3年後の2008年に化女沼（けじょぬま）が登録されました。この3つの沼はいずれも洪水調節池を兼ねており、その中でも化女沼は完全なるダム湖です＝写真＝。今回の視察で参考になったことは、水鳥や湿地の恵みを利用した農業・観光・環境教育などワイズユースが広範に図られていたことです。

越後平野の佐潟、鳥屋野潟、福島潟は、その間の距離が約17.5キロメートルで、鳥屋野潟と福島潟が洪水調節池となっており、仙北平野の湖沼群と類似しているといえます。ただ大きな相違は、仙北平野の湖沼群が農村地域にあるのと比較して、新潟の潟群は80万人という政令指定都市の中にあり、特に鳥屋野潟は市街地に近接して

いることでしょう。新潟市にとって、これらの潟群がラムサール条約に登録される意義は、大都市において「自然との共生」を国内外に表明するとともに、人口が多いゆえにより活発なワイズユースが展開できる可能性が高いことにあると思います。

「潟」への市民の誇りを育てる

20世紀は自然と対峙して、恵みの収奪と災害の克服で自然を破壊してきました。21世紀は、その反省の上に、かろうじて残された自然との共生が地球的規模で求められています。それを率先して新潟市が宣言することは、国際的に評価を高めることになるでしょう。ラムサール条約に登録されるか否かにかかわらず、今かろうじて残された自然を保全し次代に伝えていくことは新潟市民にとって不可欠な責務であると思います。とするならば、ラムサール条約に登録するとともに、潟と人との関係性を農漁業や潟利用を含めて再構築し、新潟らしい潟文化を発信することは喫緊の課題ではないでしょうか。ラムサール条約登録は、潟への市民の誇りを育て、政令指定都市としての品格を高めることになり、国内外からの観光客の増加につながるのではないかと考えます。



「仙北平野ラムサールトライアングル」にならって、福島潟、鳥屋野潟が登録され、瓢湖を含め、「越後平野ラムサールカルテット」と呼ばれる日が来ることを期待しています。

素顔の「潟」スナップ <4>

潟…どんな風景が思い浮かびますか？

このコーナーでは、潟環境研究所スタッフが潟に行って、見て、感じた「潟」の素顔を紹介します。

北山池 (江南区)



亀田砂丘のくぼ地にできた池。池を中心に整備された公園では緑色の花を咲かせる桜「御衣黄（ぎよいこう）」がありますよ。

北上の池 (秋葉区)



能代川左岸の堤防沿いにある小さな池でした。地元では「切所（きりしょ）」と呼ばれているそうです。

六郷ノ池 (秋葉区)



阿賀野川の湾曲（蛇行）部の内部にできた旧河道。知る人ぞ知る霽田気の良い場所でした。



潟食クッキング

③ 鮎のコモ被り

美しく豊かな自然が残る潟は、食の宝庫でもあります。

今回は、福島潟周辺の郷土料理「鮎のコモ被り」についてご紹介します。このコーナーではおなじみの、食文化研究家の丸山久子さんから教えていただきました。

鮎は、昭和30年頃までは新潟市では身近な食材で、大事な動物性たんぱく源でもありました。稲の収穫が終わった頃から捕れる鮎がおいしく、この時期になると、「鮎捕りは実用を兼ねた親子のアソビの1つだった」と当時の様子を顔をほころばせながら語ってくれた古老のことを思い出します。

鮎の食べ方は、行事食から普段食まで各種ありましたが、鮎のコモ被りは福島潟のお節料理の1つでした。鮎の上に盛りつける大根、ニンジン、切り昆布が、マコモやワラで編んだ生活用具のコモのようにも見たことが名前の由来になったのではないかと思います。この「鮎のコモ被り」をはじめ、昨今は、全国はもちろん、新潟市内でも当時の鮎の食べ方については、あまり知られていないように感じています。

ちなみに、日本各地の鮎の郷土料理をみると「鮎鮓（琵琶湖）」「鮎飯（岡山県）」「ふなこぐい（佐賀県・鹿島市）」「鮎鮓（長野県）」など多数あります。



【材料】(5人分)

- ・小鮎 10~15匹
- ・切り昆布 50g、大根 500g、ニンジン 100g
- ・調味料：しょうゆ、みりん、酒

【作り方 (当時の調理法をもとに)】

- ① 鍋（現在では電子レンジや圧力鍋などでも可）に焼いた鮎と昆布を入れ、タツリの水に鮎の骨が柔らかくなるまで弱火でゆっくり煮る。
※寒鮎（小鮎6~7cm）は捕った直後に塩をふり、串に刺して囲炉裏で焼き、まっこう（巻わら）に刺して保存しました。
- ② コモ材：鮎を煮た汁に千切りニンジンと大根を入れ、火が通ったら昆布（鮎と一緒に煮た昆布）を合わせて味を整える
- ③ 盛りつけ：皿に鮎を盛り、コモ材を飾り盛りする

ミニ知識

知ッテタ？カタ？カタ？

湿地というと、皆さんはどのような場所を思い浮かべますか。水で湿った草原をなんとなく想像していませんか。そこで今回は、ラムサール条約での湿地についてご紹介しましょう。

条約では、例えば、身近な水田、農業用水路をはじめ、ため池や大規模なダム湖、そして植物が生き茂るマングローブ林や海のサンゴ礁までもが湿地とされています。とても幅広いですね！



「潟」のエッセイ

④ ガタモノガタリ

松浦和美／新潟市南商工振興会・株式会社U・STYLE代表取締役



事務所前に広がる鳥屋野潟

私のデザイン会社で「地域ブランディング」を事業の一つに掲げて2年目になる。昨春はそれをより進めるために、その拠点となる鳥屋野潟の畔に事務所ごと引っ越した。

そもそものきっかけは4年程前にさかのぼる。鳥屋野潟の昔を知る方から当時の様子を聞いた。

「泳いでいたんだよ、きれいだったんだ」「海の魚もあがってきてさ」「舟で行き来したんだ」



潟ボーイ'Sシリーズ

新鮮だった。かつての暮らしを知ることで、それまで扁平だった新潟の印象が変わった。これを「潟ボーイ'S」という冊子にまとめたところ、思いのほか反響があった。

その後も「潟ボーイ'S」シリーズをつくっているが、語り継ぎの取材は地域資源の発見につながっている。これをデザイナー的に発信したい、「潟マルシェ」を思いついたのはそんな理由からだ。

ここでは伝統工芸の三角だるまをリデザインした「潟のしずく」や、農家やパン職人とコラボしたパンなどを「ガタモノガタリ」のブランド名で企画・販売している。マルシェでは、潟端の住民・農家・伝統工芸職人・障がい者福祉施設・パン職人・木工作家などとのコラ

ボレーションが進んでいる。月一回の定期開催となり、これら体験と仕事のシェアは鳥屋野潟に定着しつつある。これからは新潟市内16の潟やその周辺の人々と連携することもやってみたい。

2016年は「とやの潟ウインターキッチン」「G7キッチン」や超小型モビリティを使った社会実験、併せて地域の企業・教育機関と連携した「水浄化ロボット開発プロジェクト」などを、潟と関連して進めていく。

ヘンテコなことばかりやっているせいか、面白がってきてくれるインターンシップの学生も多い。その中から、今、スタッフとして加わっている人もいる。将来、デザインや研究開発などの「クリエイティブクラス」といわれる層や海外の人たちが、ここを訪れ暮らすようになってほしい。どうか、この先。自分たちと潟の変化が楽しみだ。



潟マルシェの様子

※潟マルシェは、平成27年11月より毎月第3日曜日に、株式会社U・STYLE スタジオ（中央区上沼651）にて開催しています。

新潟市潟環境研究所について

本市には、地域の暮らしに根差した「里潟（さとかた）」ともいうべき個性豊かな潟が多く残っています。当研究所は、これらの潟と人とのより良い関係を探求し、潟の魅力や価値を再発見・再構築するため、平成26年4月に発足しました。

潟に関わる多くの皆さまと連携しながら、自然環境や歴史、暮らし文化などについて、調査・研究を進めています。

新潟市 潟のデジタル博物館

NIIGATA City Wetland Digital Museum

新潟市内に点在する湖沼「潟」に関わる資料や情報をまとめたデジタル博物館です。

URL <http://www.niigata-satokata.com/>



発行

平成28年2月

新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務局

〒951-8550

新潟市中央区学校町通1-602-1（市役所本館4階）

☎ 025-226-2072

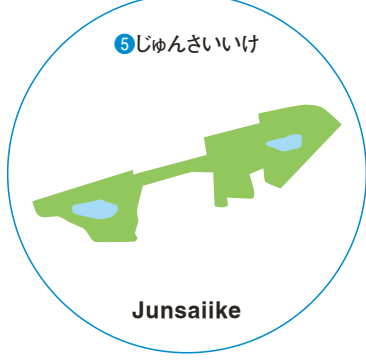
fax 025-224-3850

e-mail kataken@city.niigata.lg.jp

URL <http://www.city.niigata.lg.jp/shisei/kataken/index.html>

Facebook
ページ



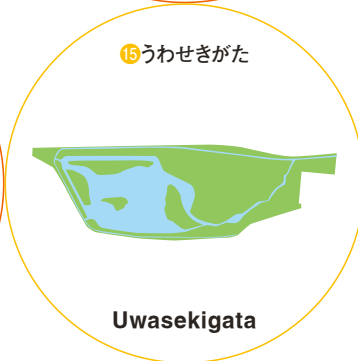


潟MAP

かたマップ

新潟市の潟(湖沼)

—このマップとともに、新たな「潟」の魅力を見つけてみませんか—



※表紙に掲載の図は、各潟の形を表現するためのものであり、実際の大きさの比率とは異なります。

越後平野は低湿地帯であったため、戦国時代には現在より多くの潟が点在しており、福島潟や鳥屋野潟などは、その頃から存在していたことがわかります。越後平野の変遷をたどると、新潟市内の潟が、どのようにその姿かたちを変えていったのかを知ることができます。



戦国時代
(1400~1500年代頃)

■新潟市発行「新潟市史 通史編1」p.16「越後平野の概観」、新潟市歴史博物館発行「絵図が語る みなと新潟」p.10「戦国時代の三ヶ津と新潟市域のみなど」をもとに作成



昭和30年頃
(1955年頃)

■国土地理院5万分の1地形図(昭和27年)をもとに作成

にいがたの「潟」

古くから越後平野の湖沼は、その成り立ちなどにかかわらず、総称して「潟」と呼ばれてきました。潟は多くの動植物が生息・生育し、憩いや活動の場として“ふるさと”を象徴する存在です。

北区

① 福島潟(ふくしまがた)
面積が市内最大の潟。国の天然記念物オオヒシクイの越冬地では飛来数が日本一です。また、希少植物オニバスの日本北限の自生地でもあります。
面積:約262ha 水面標高:-0.7m
所在地:新鼻甲

北区

② 内沼潟(うちぬまがた)
福島潟とつながっていた小さな潟。江戸時代に築堤された山倉新道(やまくらしんどう)によって、福島潟から分離されました。
面積:約1.3ha 水面標高:-0.6m
所在地:内沼

北区

③ 十二潟(じゅうにがた)
蛇行した阿賀野川の一部が残った三日月湖。かつては阿賀野川の本流でした。地元では「古阿賀(ふるあが)」とも呼ばれています。
面積:約5.4ha 水面標高:1.6m
所在地:平林、十二、灰塚

北区

④ 松浜の池(まつはまのいけ)
阿賀野川と日本海のすぐそばの砂丘地に位置する池。地元では「ひょうたん池」とも呼ばれています。希少なトンボ類が確認されています。
面積:約2.2ha 水面標高:0.5m
所在地:松浜

秋葉区

⑨ 六郷ノ池(ろくごうのいけ)
阿賀野川の河道跡にできた池。ヘラブナ釣り場として知られています。
面積:約1.6ha 水面標高:6.5m
所在地:六郷

秋葉区

⑩ 北上の池(きたかみのいけ)
能代川左岸の堤防沿いの県道の脇にある小さな池。地元では「切所(きりしょ)」と呼ばれています。
面積:約0.2ha 水面標高:4.3m
所在地:北上

西区

⑪ 佐潟(さかた)
上潟(うわかた)と下潟(したかた)の二つから成る潟。1996(平成8)年3月に、周辺湿地部を含めて、ラムサール条約湿地として登録されました。
面積:約44ha 水面標高:4.8m
所在地:赤塚

西区

⑫ 御手洗潟(みたらせがた)
佐潟の北側にある潟。この潟の名前は、かつて近くの神社にお参りする際、ここで手を洗い、身を清めたことに由来しています。
面積:約6.5ha 水面標高:6.6m
所在地:赤塚

※「水面標高」とは、東京湾の平均海面(T.P.)を標高0mにした水面の高さのことです。信濃川河口付近の日本海海面は、東京湾より0.5m程度高くなっています。

「潟」で見る・楽しむ



ハクチョウ類



トンボ



水生植物



菜の花

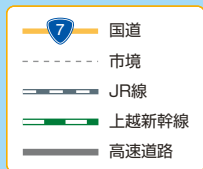


サクラ



散策

※このマップでは、自然にできた湖沼のほか、
歴史的に人々関わりの深い水辺空間として16の潟(湖沼)を掲載しています。



0 3km 6km



東区

5 じゅんさい池(じゅんさいいけ)

東池(0.3ha)、西池(0.5ha)から成る砂丘上の池。初夏にはホタルが飛び交います。この池の名前は、水生植物「ジュンサイ」由来しています。

面積:約0.8ha 水面標高:-0.3m
所在地:松園



中央区

6 鳥屋野潟(とやのがた)

市街地に隣接し、都心に貴重な自然環境を残す潟。遊水池としての機能を備えています。周辺には公園や公共施設が整備されています。

面積:約158ha 水面標高:-2.5m
所在地:鳥屋野ほか



中央区

7 清五郎潟(せいごろうがた)

鳥屋野潟の南側にある潟。鳥屋野潟で風雪が強い時にハクチョウのねぐらとなっています。「清五郎」とは、かつての新田開発に関わった人の名前です。

面積:約2.0ha 水面標高:-2.5m
所在地:清五郎



江南区

8 北山池(きたやまいけ)

亀田砂丘のくぼ地にできた池。池を中心に公園が整備され、園内では緑色の花を咲かせる桜「御衣黄(ぎょいこう)」を見ることができます。

面積:約1.6ha 水面標高:0.4m
所在地:北山



西区

13 ドンチ池(どんちいけ)

数多くの伝説が残る池。池の名前は、土地や水の権利をめぐる争われた所「論地(ろんち)」がなまったものと伝えられています。

面積:約0.3ha 水面標高:2.6m
所在地:赤塚、中権寺



西区

14 金巻の池(かねまきのいけ)

中ノ口川の堤防が、洪水時に破堤してできた池。地元では「宮池(みやいけ)」「水戸際池(みとぎわいけ)」などと呼ばれています。

面積:約0.7ha 水面標高:0.1m
所在地:木場、金巻



西蒲区

15 上堰潟(うわせきがた)

角田山の麓(ふもと)近くの潟。かつては農業のかんがい用水源でした。自然が楽しめる公園となっていますが、豪雨時には雨水の流出を抑える調整池となります。

面積:約11ha 水面標高:3.5m
所在地:松野尾



西蒲区

16 仁箇堤(にかつつみ)

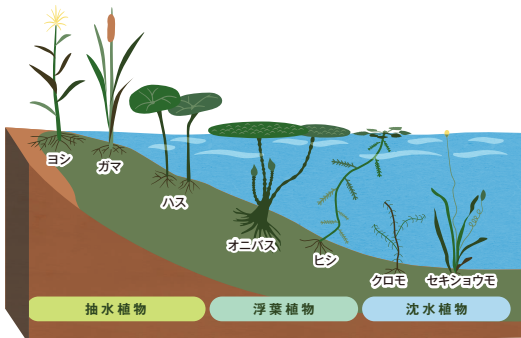
農業用水として利用されている堤。ここでは、昭和の中頃まで「堤内網(さかうちみ)」と呼ばれる道具を使った鴨猟が行われていました。

面積:約5.6ha 水面標高:9.2m
所在地:仁箇



多様な生き物たちが生育・生息する「潟」

水陸移行帯における水生植物の分布図



桜井善雄、国土交通省霞ヶ浦河川事務所編著(2004)
「霞ヶ浦の水生植物1972～1993 変遷の記録」より引用・改変

潟には陸域や水域だけでなく、その境界となる水陸移行帯があり、左の図のように、水上に茎と葉を伸ばす抽水(ちゅうすい)植物、葉を水面に浮かべる浮葉(ふよう)植物、全体が水中にあり、水底に根を張る沈水(ちんすい)植物が生育しています。

抽水植物群落は野鳥のすみかや営巣場所として、また、浮葉・沈水植物群落は、野鳥だけでなく魚類や両生類、昆虫類のすみか、えさ場となります。

多様な植物がすみ分けているこの空間は、多くの生き物たちが生育・生息している重要な場所なのです。



コハクチョウ



オニバス



アサザ



ニホンアマガエル



ギンブナ

潟の環境と人の営みとの関係

昭和の中頃まで、潟端に住む人々にとって、フナ、ドジョウ、ナマズ、コイなどの魚、カモなどの鳥、ハスやヒシなどの植物は、重要な食糧源でした。

また、植物の中でも、ヨシは屋根草や壁の下地、ヨシズの方法として利用されていました。人々がヨシを刈り取っていたことは、ヨシが吸収した水質汚濁の原因物質を潟の外へ排出することになり、潟の水質浄化に大きな役割を果たしていました。

潟底の土は、多量の有機質を含み、肥料効果が高く、稲作をする上での肥料や苗床として利用されました。低湿地の干拓土やアゼ作りにも重宝したそうです。この潟底の土をかき揚げる「ド口揚げ」は、潟が浅くなることを防ぎ、湿性遷移※を止めることにつながりました。

現在、生活様式や産業構造の変化に伴い、潟に対する人々の直接的な関わりは減ってきていますが、福島潟のヨシ焼きやヒシもぎ、佐潟の潟普請やヨシ刈りなど、潟環境の保全につながる活動をしている人たちもいます。

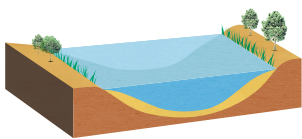


昔のヨシ刈りの様子 北区郷土博物館所蔵

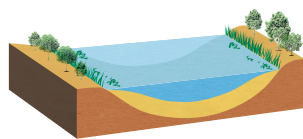
※湿性遷移(しっせいせんい)とは

ある場所に生育・生息する生物種集団が、自然に移り変わっていく現象を「遷移(せんい)」といいますが、下図のように、潟や湖など水のある場所から始まる遷移を「湿性遷移(しっせいせんい)」といいます。

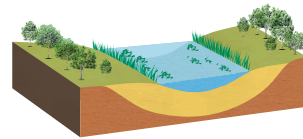
潟のような広い水辺空間は、風や川によって運ばれてくる土砂、潟の中にある動植物の遺骸(いがい)などが潟の底に堆積していくと、水深が浅くなり、やがて湿原、草原へ移行変わっていきます。



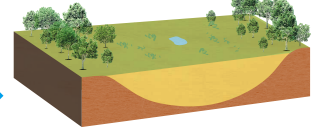
水辺の湿性林とヨシ群落がある程度で抽水植物もほとんど見られません。



堆積が進んで、抽水植物、浮葉植物、沈水植物などが進出するようになります。



水深が浅くなり、陸化がかなり進行します。植物相がもっとも多様な段階です。



陸化がさらに進行し、最終的には草原になります。

飯泉優ほか(1993)「大自然のふしぎ 植物の生態図鑑(学習研究社)」より引用・改変

潟に関する情報や歴史を知ることができる主な施設

北区郷土博物館	新潟市北区嘉山3452	TEL:025-386-1081
水の駅「ビュー福島潟」	新潟市北区前新田乙493	TEL:025-387-1491
みなとびあ(新潟市歴史博物館)	新潟市中央区柳島町2-10	TEL:025-225-6111
江南区郷土資料館	新潟市江南区茅野山3-1-14	TEL:025-383-1001
佐潟水鳥・湿地センター	新潟市西区赤塚5404-1	TEL:025-264-3050
潟東歴史民俗資料館	新潟市西蒲区三方92	TEL:0256-86-3444



鍬潟で使用されていた漁労・狩猟用具(潟東歴史民俗資料館)

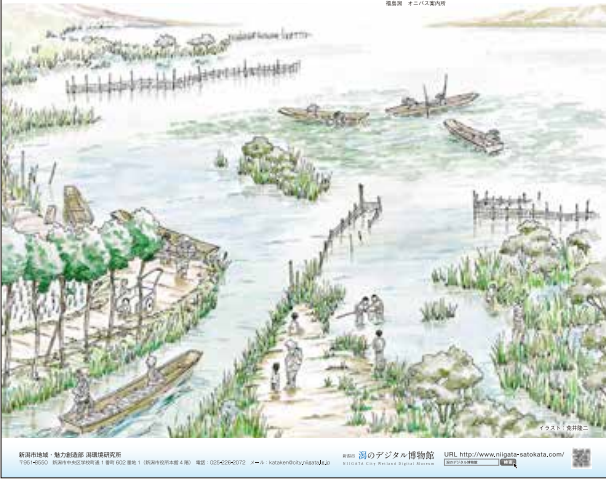
平成27年度潟環境研究所企画ポスター

「里潟」=“人と恵みを享受し合う潟”

越後平野に古くから点在した「潟」と呼ばれる多数の湖沼は、人々にとって暮らしの一部であり、生業の場所でした。

一方、潟の自然環境は、人々が潟を活用することにより維持されてきました。

生活様式や産業構造の変化に伴い、いつしか潟は、暮らしや生業の場ではなくなりましたが、今も潟には多くの動植物が生息・生育し、人々の憩いの場や活動の場として“ふるさと”を象徴する存在となっています。



潟の生態

潟には陸地や水面だけでなく、その境界となる「水辺」があります。水辺は水生植物帯とも呼ばれ、多様な植物がすみ分けており、鳥や魚、昆虫といった多くの生物種の生息空間にもなっています。



昭和の中頃まで水辺のヨシは、屋根葺きや壁の下地、ヨシズの材料として、潟底のドロは稲作をする上での肥料や苗床として使われました。ヨシを刈り取っていたことは、ヨシが吸収した水質汚濁の原因物質を潟の外に排出することになり、潟の水質浄化に大きな役割を果たしていました。また、潟底のドロをかきあげることで、潟の底が浅くなっていくのを防ぎました。

現在は、潟の環境を保全する活動として、福島潟でのヨシ焼き、佐潟での葦普請やヨシ刈りなどが行われています。



とやのがた 鳥屋野潟

面積：約150ha 所在地：中央区鳥屋野潟



鳥屋野潟の重要な機能

海より標高が低い鳥屋野潟には周囲からたくさん水が集まります。鳥屋野潟の水は親松排水機場によって毎日排水され、水面標高は常にT.P.*マイナス2.5メートルに保たれています。こうすることで、大雨が降った時、鳥屋野潟に水を溜め、周辺の住宅地などを水害から守っているのです。

* T.P. 東京湾平均海面 (Tokyo Peil) 日本の標高は東京湾の平均海面を0mとして決められており、T.P.で表されます。

都市の中の貴重な自然空間

鳥屋野潟には540種以上の植物、90種以上の鳥類が確認されています。新潟市の中心部にあって、多くの生き物たちと出会う場所です。冬には、4000羽以上のハクチョウが訪れ、新潟の冬の風物詩となっています。

人々が集い楽しく過ごせる鳥屋野潟

鳥屋野潟は新潟市中央区南部の市街地にあり、周辺には公園や公共施設が整備されています。豊かな自然を守り、育て、より魅力ある環境を創り出そうと、市民による清掃活動やイベントなどが開催され、多くの人から親しまれています。



 1 福島潟 (ふくしまがた) 面積約202ha 所在地:福島県	 2 内沼潟 (うちぬまがた) 面積約120ha 所在地:新潟県	 3 十二沼 (じゅうにがた) 面積約1420ha 所在地:新潟県、福島県	 4 松浜の池 (まつはまのいけ) 面積約122ha 所在地:新潟県
 5 六郷ノ池 (ろくごうのいけ) 面積約120ha 所在地:新潟県	 6 北上の池 (きたかのいけ) 面積約123ha 所在地:新潟県	 7 佐潟 (さかた) 面積約44ha 所在地:新潟県	 8 御手洗沼 (みたらせがた) 面積約150ha 所在地:新潟県
 9 じゅんさい池 (じゅんさいいけ) 面積約130ha 所在地:新潟県	 10 鳥屋野潟 (とやのがた) 面積約150ha 所在地:新潟県	 11 清五郎沼 (せいごろうがた) 面積約128ha 所在地:新潟県	 12 北山池 (きたやまのいけ) 面積約140ha 所在地:新潟県
 13 ドンチ池 (どんちいけ) 面積約130ha 所在地:新潟県、中野町	 14 金巻の池 (かねまきのいけ) 面積約20.7ha 所在地:新潟県、金巻	 15 上堰沼 (うわせきがた) 面積約111ha 所在地:新潟県	 16 仁箇堤 (にがたつみ) 面積約15.4ha 所在地:新潟県

にいがたの「潟」

古くから越後平野の湖沼は、その成り立ちなどからみて、総称して「潟」と呼ばれてきました。潟は多くの動植物が生息・生育し、憩いや活動の場として“ふるさと”を象徴する存在です。

